# 灰だらけ姫

## またの名「ガラスの上ぐつ」

ペロー
楠山正雄訳

# 一

むかしむかし、あるところに、なに不自由なく、くらしている紳士（しんし）がありました。ところが、その二どめにもらったおくさんというのは、それはそれは、ふたりとない、こうまんでわがままな、いばりやでした。まえのご主人とのなかに、ふたりもこどもがあって、つれ子をしておよめに来たのですが、そのむすめたちというのが、やはり、なにから、なにまでおかあさんにそっくりな、いけないわがままむすめでした。

さて、この紳士（しんし）には、まえのおくさんから生まれた、

もうひとりの若いむすめがありましたが、それは気だてなら、心がけなら、とてもいいひとだった亡（な）くなった母親そっくりで、このうえないすなおな、やさしい子でした。

結婚（けっこん）の儀式（ぎしき）がすむとまもなく、こんどのおかあさんは、さっそくいじわるの本性（ほんしょう）をさらけ出しました。このおかあさんにとっては、腹ちがいのむすめが、心がけがよくて、そのため、よけいじぶんの生んだこどもたちのあらの見えるのが、なによりもがまんできないことでした。そこで、ままむすめを台所（だいどころ）にさげて、女中のするしごとに追いつかいました。お皿を洗った

り、おぜんごしらえをしたり、おくさまのおへやのそうじから、おじょうさまたちのお居間のそうじまで、させられました。そうして、じぶんは、うちのてっぺんの、屋根うらの、くもの巣だらけなすみで、わらのねどこに、犬のようにまるくなって眠らなければなりませんでした。そのくせ、ふたりのきょうだいたちは、うつくしいモザイクでゆかをしきつめた、あたたかい、きれいなおへやの中で、りっぱなかざりのついたねだいに眠って、そこには、頭から足のつまさきまでうつる、大きなすがたみもありました。

かわいそうなむすめは、なにもかもじっとこらえて

いました。父親は、すっかり母親にまるめられていて、いっしょになって、こごとをいうばかりでしたから、むすめはなにも話しませんでした。それで、いいつかったしごとをすませると、いつも、かまどの前にかがんで、消炭（けしずみ）や灰の中にうずくまっていましたから、ままむすめの姉と妹は、からかい半分、サンドリヨン（シンデレラ）というあだ名をつけました。これは灰のかたまりとか、消炭とかいうことで、つまり、それは、「灰だらけ娘」とでもいうことになりましょう。

それにしても、サンドリヨンは、どんなに、きたない身なりはしていても、美しく着かざったふたりの

きょうだいたちにくらべては、百そうばいもきれいでしたし、まして心のうつくしさは、くらべものになりませんでした。

## 二

さてあるとき、その国の王様の王子が、さかんなぶとう会をもよおして、おおぜい身分のいい人たちを、ダンスにおまねきになったことがありました。サンドリヨンのふたりのきょうだいも、はばのきくおとうさんのむすめたちでしたから、やはり、ぶとう会におま

ねきをうけていました。

ふたりは、おまねきをうけてから、それはおかしいように、のぼせあがって、上着（うわぎ）よ、がいとうよ、ずきんよと、まい日えりこのみに、うき身をやつしておりました。おかげで、サンドリヨンには、新しいやっかいしごとがひとつふえました。なぜというに、きょうだいたちの着物に火のしをかけたり、袖口（そでぐち）にかざりぬいしたりするのは、みんなサンドリヨンのしごとだったからです。ふたりは朝から晩まで、おめかしの話ばかりしていました。

「わたしは、イギリスかざりのついた、赤いビロード

の着物にしようとおもうのよ。」と、姉はいいました。
「じゃあ、わたしは、いつものスカートにしておくわ。けれど、そのかわり、金の花もようのマントを着るわ。そうして、ダイヤモンドの帯（おび）をするわ。あれは世間（せけん）にめったにない品物なんだもの。」
ふたりは、そのじぶん、上手（じょうず）でひょうばんの美容師（びようし）をよんで、頭のかざりから足のくつ先まで、一分（ぶ）のすきもなしに、すっかり、流行（りゅうこう）のしたくをととのえさせました。
サンドリヨンも、やはりそういうことのそうだんに、いちいち使われていました。なにしろ、このむすめは、

もののよしあしのよく分かる子でしたから、ふたりのために、いっしょうけんめい、くふうしてやって、おまけに、おけしょうまで手つだってやりました。サンドリヨンに髪（かみ）をあげてもらいながら、ふたりは、

「サンドリヨン、おまえさんも、ぶとう会に行きたいとはおもわないかい。」といいました。

「まあ、おねえさまたちは、わたしをからかっていらっしゃるのね。わたしのようなものが、どうして行かれるものですか。」

「そうだとも、灰だらけ娘のくせに、ぶとう会なんぞに出かけて行ったら、みんなさぞ笑うだろうよ。」と、

ふたりはいいました。

こんなことをいわれて、これがサンドリヨンでなかったら、ふたりの髪をひんまげてもやりたいとおもうところでしょうが、このむすめは、それは人のいい子でしたから、あくまでたのまれたとおり、りっぱにおけしょうをしあげてやりました。ふたりのきょうだいたちは、もう、むやみとうれしくて、ふつかのあいだ、ろくろく物もたべないくらいでした。そのうえ、でぶでぶしたからだを、ほっそりしなやかに見せようとおもって、一ダースもレースをからだにまきつけました。そうして、ひまさえあれば、すがたみの前に立っ

ていました。

　やがて、待ちに待った、たのしい日になりました。ふたりは庭におりて、出かけるしたくをしていました。サンドリヨンは、そのあとから、じっと見送れるだけ見送っていました。いよいよすがたが見えなくなってしまうと、いきなりそこに泣きふしてしまいました。

　そのとき、ふと、サンドリヨンの洗礼式に立ち合った、名づけ親の教母が出て来て、むすめが泣きふしているのを見ると、どうしたのだといって、たずねました。

「わたし、行きたいのです。――行きたいのです。―

―」こういいかけて、あとは涙で声がつまって、口がきけなくなりました。

このサンドリヨンの教母というのは、やはり妖女（ようじょ）でした。それで、

「あなたは、ぶとう会に行きたいのでしょう。そうじゃないの。」と聞きました。

「ええ。」と、サンドリヨンはさけんで、大きなため息をひとつしました。

「よしよし、いい子だからね、あなたも行かれるように、わたしがしてあげるから。」と、妖女はいいました。

そうして、サンドリヨンの手を引いて、そのへやへつ

れて行きました。

「裏の畠へ行って、かぼちゃをひとつ、もぎとっておいで。」

サンドリヨンは、さっそく行って、なかでもいちばんいいかぼちゃをよって、妖女のところへ持ってかえりました。けれども、このかぼちゃで、どうして、ぶとう会へ行けるのか、さっぱり考えがつきませんでした。

かぼちゃを受けとると、妖女は、そのしんをのこらずくり抜いて、皮だけのこしました。それから妖女は、手に持ったつえで、こつ、こつ、こつと、三どたたく

と、かぼちゃは、みるみる、金ぬりの、りっぱな馬車にかわりました。

妖女は、それから、台所（だいどころ）のねずみおとしをのぞきに行きました。するとそこに、はつかねずみが六ぴき、まだぴんぴん生きていました。

妖女は、サンドリヨンにいいつけて、ねずみおとしの戸をすこしあげさせますと、ねずみたちが、うれしがって、ちょろ、ちょろ、かけ出すところを、つえでさわりますと、ねずみはすぐと、りっぱな馬にかわって、ねずみ色の馬車馬が六とう、そこにできました。けれども、まだ御者（ぎょしゃ）がありませんでした。

「わたし行って、見て来ましょう。大ねずみが、まだ一ぴきかかっているかもしれませんから。それを御者にしてやりましょう。」

「それがいいわ。行ってごらん。」と、妖女はいいました。

サンドリヨンは行って、ねずみおとしを持って来ましたが、そのなかに、三びき、大ねずみがいました。妖女は三びきのうちで、いちばんひげのりっぱな大ねずみをより出して、つえでさわって、ふとった、元気のいい御者にかえました。それはめったに見られない、ぴんとした、りっぱな口ひげをはやしていました。そ

れがすむと、妖女（ようじょ）は、サンドリヨンにむかって、

「もういちど、裏（うら）のお庭へ行って、じょろのうしろにかくれているとかげを六ぴき、見つけていらっしゃい。」といいました。

　サンドリヨンは、いいつけられたとおり、とかげをとってかえりますと、妖女はすぐ、それを六人のべっとうにかえてしまいました。それは、金や銀のぬいはくのある、ぴかぴかの制服（せいふく）を着て、馬車のうしろの台（だい）にのりました。そうして、そこに、ぺったりへばりついたなり、押しっくらしていました。そのとき、妖女は、サンドリヨンにいいました。

「ほら、これでダンスに行くお供ぞろいができたでしょう。どう、気に入って。」

「ええ、ええ、気に入りましたとも。」と、サンドリヨンは、うれしそうにさけびました。「けれどわたし、こんなきたないぼろを、着て行かなければならないでしょうか。」

妖女はそこで、ほんのわずか、つえの先で、サンドリヨンのからだにさわったとおもうと、みるみる、つぎはぎだらけの着物は、宝石（ほうせき）をちりばめた金と銀の着物にかわってしまいました。それがすむと、妖女はサンドリヨンに、それはそれは美しいリスの皮の上（うわ）ぐつ

（ガラスの上ぐつだともいいます。）を、一そくくれました。

こうして、のこらずしたくができあがって、いよいよサンドリヨンが馬車にのろうとしたとき、妖女（ようじょ）はあらためて、サンドリヨンにむかって、なにはおいても、夜なか十二時すぎまで、ぶとう会にいてはならないと、きびしくいいわたしました。十二時から一分でもおくれると、馬車はまたかぼちゃになるし、馬は小ねずみになるし、御者（ぎょしゃ）は大ねずみになるし、べっとうはとかげになるし、着ている着物も、もとのとおりのぼろになるのだから、といってきかせました。

サンドリヨンは、妖女に、けっして夜なかすぎまで、ぶとう会にはいませんという、かたいやくそくをしました。そうして、もうはち切れそうなうれしさを、おさえることができないようなふうで、馬車にのりました。

## 三

さて、王子は、その晩、たれも知らない、どこぞのりっぱな王女が、いましがた馬車にのって、ぶとう会についたという知らせを聞いて、わざわざ迎えに出て

来ました。王子は、王女が馬車からおりると、その手をとって広間の、みんなおおぜい居る中へ案内して来ました。すると、広間の中はたちまち、しんと静まりかえって、みんなダンスをやめました。バイオリンの音もしなくなりました。それは、このめずらしいお客さまの美しさに、たれもかれも気をとられて、ぼんやりしてしまったからでした。そのなかで、ただかすかに、こそこそ、ささやく声がして、

「ほう、きれいだなあ。ほう、きれいだなあ。」とばかり、いっていました。

王様も、もうお年はとっておいででしたけれど、そ

のときは、おもわずサンドリヨンの顔を、じっとながめずにはいられませんでした。そうして、そっとお妃の耳もとにささやいて、

「こんなきれいな、かわいらしいむすめを見るのは、久しぶりだ。」と、いっておいでになりました。

　貴婦人たちは、貴婦人たちで、みんなじろじろと、サンドリヨンの着物から、頭のかざりものをしらべてみて、まあ、まあ、あれだけのりっぱな材料と、それをこしらえるりっぱな職人とさえあれば、あしたにもさっそく、この型で、じぶんもこしらえさせてみよう、と考えていました。

王子は、サンドリヨンを、そのなかでいちばん名誉（めいよ）の上席（じょうせき）へ案内（あんない）して、それからまた、つれ出して、いっしょにダンスをはじめました。

サンドリヨンは、それはそれは、しとやかにおどったので、みんなは、いよいよびっくりしてしまいました。さて、けっこうなごちそうが、まもなく出ましたが、若い王子は、サンドリヨンの顔ばかりながめていて、ひとつものどにはとおりませんでした。

サンドリヨンはやがて、じぶんのきょうだいたちのいるところへ出かけて行って、そのそばに腰をかけて、王子からもらったオレンジや、レモンを分けてやった

りして、それは、いろいろやさしいそぶりをみせました。けれど、ふたりは、それがたれだか分からなかったものですから、ただもうびっくりして、目ばかりくるくるさせていました。サンドリヨンは、こうしてきょうだいたちのごきげんをとっているうちに、時計が十二時十五分前を打ちました。するといきなり、サンドリヨンは、ほかのお客たちに、ていねいにあいさつをして、ふいと出て行ってしまいました。

さて、うちへかえると、サンドリヨンは、そこに待っていた妖女にあって、たくさんお礼をいったのち、あしたもまた、ぜひぶとう会へやってくださいといってたのみました。それは、王子の熱心なおのぞみであったからです。

こうして、サンドリヨンが、ぶとう会であったことを、妖女にせっせと話をしていますと、やがて、ふたりのきょうだいがかえって来て、こつ、こつ、戸をたたきました。サンドリヨンは、かけて行って、戸をあけてやりました。

「まあ、ずいぶん長く行っていらしったのね。」と、サ

ンドリヨンはさけんで、あくびをして、目をこすって、のびをしました。それは、うたたねをしていて、たった今、目がさめたというようなふうでした。けれど、じつはふたりが出て行ってから、サンドリヨンは、まるっきりねたくもねられない気持だったのです。

「おまえさん、ダンスに行ったら、それはたいくつなんぞしなかったろうよ。なにしろ、あそこへは、まあ、世の中に、こんなきれいな人があるかと思うほど、美しいお姫（ひめ）さまが来なすったのだよ。その方が、わたしたちに、いろいろとやさしいことをおっしゃって、ごらん、こんなにレモンだの、オレンジだのをくださっ

たのだよ。」と、きょうだいのひとりがいいました。

サンドリヨンは、そんなことには、いっこうむとんじゃくなようすでした。もっとも、きょうだいたちに、そのお姫さまの名をたずねましたが、ふたりは、それは知らないといいました。そうして、王子様がそのことで、たいそうむちゅうになって、その名を、とても知りたがって、みんなにたずねておいでだったという話をしました。そう聞くと、サンドリヨンはにっこりして、

「まあ、その方、どんなにお美しいでしょうね。ねえさまたち、いらしって、ほんとうによかったのね。わ

たし、その方見られないかしら。まぁねえ、ジャボットねえさま、あなたのまい日着ていらっしゃる、黄いろい着物を、わたしにかしてくださらないこと。」といいました。

「まあ、あきれた。」と、ジャボットはさけびました。「わたしの着物を、おまえさんのようなきたならしい、灰のかたまりなんかに、かしてやられるもんか。ひとをばかにしているよ。」

サンドリヨンは、いずれそんな返事だろうとおもっていました。それで、そのとおりにことわられたのを、かえってありがたくおもっていました。なぜといって、

きょうだいが、じょうだんをいったのを真にうけて、着物をかしてくれたら、どんなになさけなくおもったでしょう。

## 五

さて、そのあくる日も、ふたりのきょうだいは、ぶとう会へ出かけて行きました。サンドリヨンもやはり、こんどは、もっとりっぱに着かざって、出かけて行きました。王子は、しじゅうサンドリヨンのそばにつきっきりで、ありったけのおせじや、やさしいことば

をかけていました。それがサンドリヨンには、うるさいどころではありませんでしたから、ついうかうか、妖女にいましめられていたことも忘れていました。それですから、まだまだ時計が十一時だと思ったのに、十二も打ったのでびっくりして、ついと立ちあがって、めじかのようにはしっこくかけ出しました。王子もすぐあとを追いかけましたが、とうとう追いつきませんでした。けれど、サンドリヨンも、あわてたまぎれに、金の上ぐつを片足落しました。それを王子は大事にしまっておきました。サンドリヨンは、うちにかえりはかえりましたが、すっかり息を切らしてしまいました。

もう馬車も、べっとうもなくて、また、いつもの古着のぼろにくるまったなり、ただ片足だけはいてかえった、金の上ぐつを持っていました。

　さて、サンドリヨンが出て行ったあとで、王様のお城の番小屋へ、おたずねがありました。

「お姫(ひめ)さまが、ひとり、門を出て行くところを見なかったか。」

　ところが、番兵の返事は、

「はい、見たのはただひとり、ひどくみすぼらしいなりをした若いむすめでした。それは貴婦人(きふじん)どころか、ただのいなかむすめとしか、おもわれないふうをして

いました。」というのでした。
さて、ふたりのきょうだいが、ぶとう会からかえってくると、サンドリヨンは、こういって聞きました。
「たんとおもしろいことがありましたか。きれいなお姫さまは、きょうも来ましたか。」
ふたりがいうには、
「ああ、けれども、その人ったら、十二時を打つといっしょに、あわてて逃げだしたよ。あんまりあわてたものだから、金の上ぐつ（うわ）を、片足落して行ったのさ。その上ぐつの、かわいらしいことといってはないものだから、王子は、それをしまっておきなさった。王子は

ぶとう会でも、しじゅうお姫(ひめ)さまのほうばかり見ていらしった。きっと、王子は、金の上ぐつをはいているきれいなひとを、すいていらっしゃるにちがいないよ。」

## 六

なるほど、ふたりのいったとおりにちがいはありませんでした。それから二三日すると、王子はラッパを吹いておふれをまわして、その金の上ぐつの、しっくり足にはまるむすめをさがして、お妃にするといわせ

ました。そうして、王子は、家来たちに、その金の上ぐつを持たせて、王女たちから貴族のお姫さまたち、それから御殿じゅう、のこらずの足をためさせてみましたが、みんなだめでした。

さて、とうとうまわりまわって、金の上ぐつは、いじのわるい、ふたりのきょうだいたちのところにまわって来ましたから、ふたりとも赤くなって、むりに足をつっこもうとしましたが、どうして、どうして、それはみんな、気のどくな、むだな骨おりでした。

サンドリヨンは、そのとき、わきで見ていますと、それはなんのこと、じぶんの半分おとしてきた上ぐつ

でしたから、ついわらい出してしまって、
「かしてくださらない。わたしの足にだってあうかもしれないから。」といいました。
すると、ふたりのきょうだいは、ぷっと吹き出して、サンドリヨンをからかったり、あざけったり、いじわるく追いだそうとかかりました。けれど、金の上ぐつを持ったお役人は、じっとサンドリヨンの顔を見て、これはめずらしく美しいむすめだとおもいましたから、たとえ、たれでも、ためすだけは、ためしてみなければならない、それが王子様のおいいつけだといいました。

そこで、サンドリヨンに腰をかけさせて、上ぐつを、その足にはかせますと、それはするりと、ぐあいよくはいって、まるでろうでかためたように、ぴったりくっついてしまいました。ふたりのきょうだいは、そのとき、どんなにびっくりしたでしょう。どうして、それどころか、サンドリヨンは、かくしの中から、もう片かたの上ぐつを出して見せました。ちょうどそのとき、サンドリヨンの教母（きょうぼ）の妖女（ようじょ）がすぐあらわれて、杖で、サンドリヨンの着物にさわりますと、こんどは、まえよりもまた、いっそう美しい、りっぱな着物にかわりました。

それで、ふたりのきょうだいには、あのぶとう会で見た美しいお姫（ひめ）さまが、サンドリヨンであったことが分かりました。ふたりは、サンドリヨンの足もとにつっぷして、これまでひどい目にあわせた罪（つみ）をわびました。サンドリヨンは、ふたりの手をとっておこして、やさしくだきしめました。そして、これまでふたりのしたことは、なんともおもわない。そのかわり、これからは、やさしくしてくれるようにといいました。

サンドリヨンは、りっぱな着物を着たまま、王子の前へつれて行かれました。王子は、それで、いよいよサンドリヨンがすきになって、それから四、五日して、

めでたくご婚礼（こんれい）の式（しき）をあげました。
　サンドリヨンは、顔が美しいように、心のやさしいむすめでしたから、ふたりのきょうだいをも、お城へ引きとってやって、ご婚礼のその日に、やはり、ふたりの貴族（きぞく）にめあわせることにしました。

　顔とすがたの美しいことは、男にも女にも、とうといたからです。でも、やさしく、しおらしい心こそ、妖女のこの上ないおくりものだということを知らなくてはなりません。

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店
　　1950（昭和25）年5月1日発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。
※底本は、表題の「灰かぶり姫」に「サンドリヨン」とルビをふっています。
入力：大久保ゆう
校正：秋鹿
2006年1月21日作成